空白の戦記

吉村 昭

新潮社

空白の戦記　定価四三〇円

昭和四十五年九月十日　印刷
昭和四十五年九月十五日　発行

著者　吉村昭

発行者　佐藤亮一

発行所　東京都新宿区矢来町七一
株式会社　新潮社
電話　東京二六〇—一一一一
〒一六二　振替東京八〇八

（乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・凸版印刷株式会社　製本・大進堂製本所
© Akira Yoshimura, Printed in Japan, 1970.

空白の戦記　目次

艦首切断　7
顚覆　67
敵前逃亡　109
最後の特攻機　141

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

太陽を見たい　161
軍艦と少年　191
あとがき　223

装

幀

難

波

淳

郎

空白の戦記

艦首切断

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

昭和十年九月二十五日午前零時を過ぎた頃、北海道函館港内の黒々とした海面上に、にわかに信号燈の点滅が増した。

夜空は雲でおおわれ、星の光さえみえない。函館港をふちどる市街地も寝静まって、わずかに灯が点々ともれているだけであった。

函館市民は、数日前から港内にかなりの数の海軍艦艇が入港していることを知っていた。新鋭艦とも思われる重巡以下十数隻とさらにそれを越える数の駆逐艦が、所せまいまでに碇泊している。そして市内には、上陸した海軍士官や下士官、兵の散策する姿が目立っていた。

市民は、それらの艦艇が演習のため函館港に集結していることは知っていたが、出港はいつ

なのか、その行先はどこなのか知らなかった。
信号燈は、せわしなく闇の港内でひらめきつづける。それは、艦艇の群れが出港する前ぶれでもあった。
東の空をおおっている雲が明るみはじめ、それが徐々に夜空一面にひろがっていった。夜が明けはじめたのだ。
海面には波が立ち、艦艇の舷側にあたる海水の泡立ちも白く浮き上ってみえてきた。薄黒い雲はかなりの速さで走っている。
各艦艇では、出港準備に全力をあげていたが、荒天に対する準備作業にもあわただしい動きをしめしていた。それは、気象通報によって第一、第二の二つの台風の存在がつたえられていたからであった。
第一台風は、沖縄南方海上に発生、北北西に進んで四国に激突すると、瀬戸内海から中国地方をななめに横断し、すでに日本海沿いに北上していた。
その規模はきわめて大きく、九州、四国、中国をはじめ、東海、関東、東北の各地方に強風をまじえた豪雨を降らせて大被害をあたえ、海上も荒れに荒れていた。そして、やがては、北海道にも上陸することが予想され、その影響をうけて函館港の海面も波立っていたのだ。
しかし、函館港を出港する演習艦隊は、その第一台風の影響を直接受けることはないと判断していた。艦隊の進路は太平洋で、丁度台風を回避するように東方に向けて出港する。それに

台風の勢いも次第に弱まってきていて、艦隊の航行に支障はないことが確認されていた。

問題は、第二台風であった。

その台風は、第一台風とほとんど同時に太平洋上の小笠原諸島北方六〇浬付近に発生、中心示度七三五ミリの規模をもって毎時五〇キロの速度で移動していた。しかし、それも関東地方にむかって一直線に北上しており、むろんその影響は幾分受けるだろうが、丁度すれちがう形になるのでほとんど不安はもたれていなかった。

……つまり、艦隊が、第一、第二台風に直接遭遇するおそれは全くといっていいほど考えられなかった。しかし、その余波で海上は荒れているだろうし、太平洋上に乗り出してゆく全艦艇は荒天に対する準備をしておく必要があったのだ。

各艦艇内では、艦隊司令部の指示にしたがって防水扉や窓をしめ、移動しやすい物すべてをロープで固縛し、ライフライン（命綱）を甲板に張ったりすることに専念していた。

やがてそれらの作業が完全に終了した頃、不意に錨を巻く重々しい音が随所でおこり、同時に艦艇の尾部でスクリューが海水を波立てて回転しはじめた。そして、駆逐艦を先頭に、朝霧の中を艦艇の群れが港口にむかって動き出した。

――午前六時〇分、それは予定通りの出港時刻であった。

その演習艦隊の出港は、函館市民にとってしばしば見なれた変哲もない光景であったが、その演習の背景には極度に緊迫化した国際情勢の推移がひそんでいた。

大陸では、満州事変につづいて上海事変が発生、それぞれに戦火はやんでいたが、国内では五・一五事件によって総理大臣犬養毅（つよし）暗殺以後、軍部の力は急激に増してきていた。それにつれて日本に対する諸外国の圧力も増し、外交折衝による牽制がしきりにおこなわれていた。

大正七年末に休戦となった第一次大戦後、欧米各国は軍備拡張に狂奔し、日本もそれにならって積極的に国費を投入していた。四囲を海にかこまれた国状から海軍力の増強は日増しに進み、列国の中でも殊にアメリカは、日本海軍に大きな脅威をいだいていた。

アメリカは、日本海軍に対抗する意味から戦艦十隻、巡洋艦六隻をそなえたダニエルス建艦計画を発表、その後さらにその規模を大拡充した建艦計画に着手した。それに応じて日本海軍も、最も近代的な戦艦八隻——長門、陸奥、土佐、加賀、紀伊、尾張、第十一号、第十二号艦と、巡洋戦艦八隻——天城、赤城、高雄、愛宕、第八号、第九号、第十号、第十一号艦を第一線兵力とし、艦齢八年から十六年をへた扶桑、山城、伊勢、日向、摂津、安芸、薩摩の七戦艦、霧島、榛名、比叡、金剛、生駒、伊吹、鞍馬の七巡洋戦艦を第二線兵力として、そのほか巡洋艦二十四隻、駆逐艦六十四隻、潜水艦七十四隻をふくむ合計百九十二隻の精鋭艦をそなえた八・八艦隊案をもってこれに対した。

こうした列国のはげしい建艦競争に再び世界大戦の発生する恐怖をいだいた世界各国は、軍縮会議を開催、その席上アメリカ・イギリス対日本の主力艦保有比率を五・五・三と決議し、日本もそれに同意した。その結果、日本海軍の八・八艦隊案は、実施途上で完全に崩れ去った。

しかし、日増しに激しくなるアメリカの対日圧迫に反撥した一部の軍人たちは、五・五・三の比率に不満をいだいて、軍縮協定破棄を主張、その強硬意見はたちまち軍部を支配し、前々年の昭和八年には、松岡洋右（ようすけ）がジュネーブで国際連盟からの脱退を正式に通告していた。

そうした経過の中に迎えた昭和十年は、さらに国際的にも大きな意味をもっていた。それは、その年が五年間延長されていた軍縮条約の期限ぎれの年であったからであった。

むろんアメリカ、イギリス両国は有効期限の再延長を強く望んでいたが、日本海軍部内の大勢を支配した条約脱退派がこれを無視することは確実と思われていたのだ。

そうした緊迫した国際情勢を背景に、日本海軍は、将来アメリカ海軍との対決を予想してその年の演習に異常なほどの熱意を示した。

演習に参加する艦艇は、まず青軍（味方側）と赤軍（敵側）に分けられた。

青軍は、日本海軍を象徴した常備連合艦隊によって編成され、これには、大改装を終ったばかりの戦艦山城、榛名をふくむ第一、第二艦隊の主力艦のほとんどが配置され、その攻撃標的として赤軍の艦隊が編成された。赤軍は、仮想敵国であるアメリカ海軍を象徴したもので、予備艦として待機していた艦艇をかき集めた臨時編成の第四艦隊がそれに当った。

この青・赤両軍間の演習は、七月から開始されていたが、九月下旬三陸沖東方一、二〇〇キロの太平洋上で最後の決戦がおこなわれ、それによって大演習は終了する予定になっていた。

……函館港に集結し、そして九月二十五日午前六時〇分、太平洋上に向け出港していった艦

隊は、仮想敵とされた赤軍――第四艦隊（司令官松下元中将）であったのだ。

函館港から湾内に出ると、第四艦隊の艦艇は、たちまちはげしい波にもまれはじめた。日本海沿いに北上している第一台風の影響で、秒速一三メートルの南の風が海上を荒れさせていたのだ。

軍艦旗は、音をたててはためき、艦艇は、押し寄せる波を押し分けるように津軽海峡に進み出た。

波は横なぐりに舷側に激突し、艦艇の動揺ははげしくなった。しかし、全艦艇は、二列の体形（並列陣）をくずさず、やがて汐首岬の南方海上で針路を東に向けると、太平洋上の演習発動点に向って航進しはじめた。

第四艦隊は、重巡足柄を艦隊旗艦に、妙高、川内、那智、羽黒、最上、三隈、北上、大井、木曾、天竜、鬼怒、那珂の各巡洋艦に、空母竜驤、潜水母艦大鯨を配し、さらに初雪、白雪、夕霧、天霧、叢雲、薄雲、白雲、秋風、春風、帆風、羽風、菊月、三日月、睦月、望月、卯月、夕月、如月、弥生、曙、朧、潮等の駆逐艦群に潜水艦をふくめたものであった。

下北半島の山なみの影も没して、艦隊の周囲は、大きくうねる波頭だけになった。

風は音をたてて走り、甲板上には波が落下し、絶えず海水に洗われている。殊に、吃水の低い駆逐艦は、波の中ではげしく上下していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com